



東北ヘルプ ニュースレター

2022年 夏号

- 東北ヘルプは、また新しく
新代表より、ご挨拶申し上げます。 1 頁
- 釜石から
「街の牧師」として：高橋夫妻インタビュー 2～9 頁
- 陸前高田から
株式会社「陸前高田企画」村上清さん インタビュー 10～11 頁
- 被災地・石巻で 本当の「福祉」を
「べてるの風」のパン工房 12～16 頁
- 福島宣教の働きを継いで
「シオンの丘」の「プーさんプロジェクト」 17～21 頁
- 会計報告 22 頁

東北ヘルプは、また新しく

新代表より、ご挨拶申し上げます。

東北ヘルプ代表 川上直哉

2022年6月27日、特定非営利活動法人「被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」の年次総会が行われました。そこで、以下のことが決定されました。

- 代表を、吉田隆から川上直哉に変更する。
- 理事に、大島博幸と李貞妊を加える。

これで、「東北ヘルプ」は4回目の組織変更を済ませることになりました。その経緯と意味を、以下に記します。

経緯1 前史

1989年、「昭和天皇逝去」を受け「仙台キリスト教連合」が発足。その目的は、仙台のキリスト者による一致した声明を作成・発表することにあった。

経緯2 発足

2011年3月18日、「仙台キリスト教連合」は緊急会議を開催し、「3.11」に対応するために「被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」を発足させる。「支援者を支援する」ことをそのミッションとし、「青森から福島まで」をその責任範囲と定め、超教派による教会への緊急支援と、諸宗教協働による民生支援活動を開始した。

経緯3 財団法人

2011年5月、世界教会協議会に関する諸団体が「3.11」への支援を本格化させ、その現地受け皿として「東北ヘルプ」が指名される。この要請に応えるべく「東北ヘルプ」は財団法人を設立。以後、全国・全世界からの支援金を受け付け、支援プロジェクトを展開する。

経緯4 NPO法人

2013年6月、世界教会協議会関係の諸団体からの支援が漸次終了することを受け、「東北ヘルプ」は上記の財団法人をNPO法人に移行させる。このことにより、津波被災地での「復興」の歩みと、原子力災害の「復旧」の難しさと、その両方を現場で担うための「持続可能な組織」となる。

経緯5 現在

上記の経緯を辿り、「NPO法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」は

- 仙台キリスト教連合の長教派的活動
- 諸宗教協働の支援者を支援する働き
- 全国・全世界の支援の受付窓口
- 現場での持続可能性

という特徴を帯びた組織として、「10年を超えた被災地」に残された。この内、特に「現場での持続可能性」を強化するために、組織のスリム化を極限まで進めつつ、さらに「超教派・諸宗教協働での『支援者を支援する』働き」を追求するために、理事会組織を強化する。

以上が、2022年度総会での到達点となりました。今後、川上が「事務局長」の役割を実質的には担いつつ、「代表」の責任を負います。その結果、権限の集中がもたらす弊害も予想されます。そこで、初代代表であった吉田先生には「理事」として引き続きの参与を賜りつつ、「福島」と「クリシタンツアー」を念頭に、日本バプテスト連盟福島「主のあしあとキリスト教会」牧師大島先生と、旅行業のエキスパートである李さんに、理事に加わっていただきました。

今後、いよいよ、東北ヘルプは活動を展開して行きたいと思えます。具体的には、

- ◆ 「3.11」の復旧・復興に尽力する現場を訪問し、その必要を知り、広いつながりの中で「支援者への支援」を組み立てる。
- ◆ 現場で知られた取り組みを全国に発信し、広く支援を呼びかける。

ということを、丁寧に一つずつ、展開したいと思えます。今号のニュースレターに、そうしたことを表現できていればと願っています。ご高覧を賜ればと願っております次第です。

以上のことを思う時、一つの大きな励みは、「献金」の推移にあります。本ニュースレターの最終ページに、会計報告がございます。その報告は、総会后初めての理事会で報告した財務報告の通り、掲載しました。それは

- 献金額は、一昨年度以来、横ばいである。
- 献金件数は、一昨年度以来、増加傾向にある。

ということを示しています。それは本当に、大きな励みとなるデータでした。皆様のお心が、一つひとつ、力強く私たちをお支え下さっている。そのことを、感謝してまた、歩み出します。

理事会、そして仙台キリスト教連合世話人会のご指導とご助力を賜りつつ、東北ヘルプは進みます。その歩みに、引き続き皆様もご同道賜れば、本当に幸いに存じます。どうぞ、改めてのご指導・ご支援・ご加禱を、よろしくお願いいたします。

2022年8月21日 東北ヘルプ代表

川上 直哉

釜石から

「街の牧師」として：高橋夫妻インタビュー

2022年7月3日(日)午後、中澤竜生理事と共に、釜石市を訪問しました。東日本大震災で「死者・行方不明者1,121人、全壊住宅2,957戸」という大きな被害を受けた釜石市です。2012年からこの地に支援者として住まい、今もその活動を続けておられる牧師・高橋和義さんと、お連れ合いの高橋芳江さんに、お話を伺いました。

(聞き手：川上直哉)



1. 東北の被災地とのかかわり

——ご夫妻で、東北・岩手に根を下ろされました。

高橋和義さん

はい。とりわけ妻の働きは、素晴らしいものだと思います。

高橋芳江さん：

どうでしょうか…今、私は、地域の子どもに英語を教えています。東京の教会に赴任していた時も、英語を教えていました。その頃は「英語教室をするなら、教会に人を集めるために」と、考えたと思います。でも、今は違います。教会の人集めではなく「地域に奉仕するために」お役に立ちたい。子どもたちの未来を拓き、街の将来へとつながればいい。そんな思いを持っています。

中澤理事：

県紙の『岩手日報』で文芸作品が評価され、地方文壇へもデビューされました。

高橋芳江さん：

そんな大げさな事でもないかもしれません。ただ、「被災者の心」を表現できればと願っています。「被災地のために祈る夫の姿」を表現したら、「そこに感動した」という感想をいただいたことがあって、本当にうれしく思いました。

——いつ頃から、岩手・釜石で

活動を続けておられるのですか？

高橋和義さん：

2012年からです。二つの教会による被災者支援団体で奉仕して、2016年度から、釜石市社会福祉協議会からお声をかけていただいて、今の立場になっています。もう7年目になりました。



左から、高橋芳江さん、和義さん、中澤理事

——ご家族が近くにおられるのですか？

高橋和義さん：

アメリカ人宣教師と結婚した娘が宮古市におります。夫婦で新しい教会を始めたばかりです。その手伝いも、させていただいています。

——震災以前は、東京で牧師をされていました。

高橋和義さん：

はい。東京の教会での牧師としての働きを終えたちょうどその時、東日本大震災が起こり、何か、神様からの「召し」があるような気がしました。「向こうから掴まれる」という、不思議な感じでした。神様の導きを感じたのです。そしてすぐ「災害救援キリスト者連絡会 (DRC ネット)」の事務局で仕事をさせて頂きました。いわゆる「後方支援」の仕事でした。その働きの中で、被災各地を見る機会を得て「現場に入りたい」と強く願わされたことでした。そして、祈り求めていましたら、OMFインターナショナル (国際福音宣教会) から、お声がけをいただいたのです。2011年3月11日の「あの時」の感じが思い出されました。「釜石・大槌地区が手薄だ」ということで「支援センターを開設して支援活動をしてほしい」という要請をいただいたのでした。

2. 釜石の今

——赴任してみて、どんな印象でしたか？

高橋芳江さん：

被災直後に数日間だけ訪れた義理の息子は、釜石の北の宮古は「エデンの園」のようだという印象を持ったようでした。釜石は「鉄とラグビーの町」でした。

高橋和義さん：

ここは3万人くらいの、小さな地方都市です。製鉄産業で栄えた「昔の栄光」の残光が強いのですが、実際には、製鉄事業は止み、製鉄関係の雇用は少なく、他の産業もなかなか育たない、という悩みを持っています。でも、素晴らしい港があります。そして、海運では東日本大震災前より活気があるようです。

——この地に根を下ろして、
初めて見えてくるものがありますね。

高橋和義さん：

被災地の悲しさ、ということでしょうか。人の心も、過去へと向かいがちがします。過去から抜けられない、という感じです。「企業年金」も、過去の遺産としてまだ「しっかり」あるものですから、現実問題として、なかなか、次へ動き出せないという面もあるかと思えます。

——「8050問題」という言葉があると聞きました。

高橋和義さん：

はい。もともとは「若者の引きこもりが長期化して親も高齢になり、収入や介護の問題が起こって社会的に孤立する」という社会現象をさす言葉ですね。でも、ここ釜石では「企業年金が比較的豊かな80代がおられるので、50代の現役世代が働かずに介護に専念しても、各世帯の経済が回る。でも、50代の世代は就労せずに今を過ごしているのだから、先行き厳しい事態に至る」という現実を指す言葉、と思っています。市政を見ても、元は大きな企業城下町だったという事実の影響と思われる問題が、ここにあるように思えます。

——そうしたところでは、「よそ者」が重要な役割を果たしますね。

高橋和義さん：

そうありたいと願います。でも、「よそ者」仲間が減っていつているのも現実です。実際、外国からの宣教師も、震災直後こそ、この釜石にも何人もおられたのですが、今はゼロです。伝道してもなかなか教会形成に繋がりにくく、「教会員」も簡単には増えません。支援に集まっていた献金も期限がきて、経済的な問題も発生し、定着できないのだろうと思います。



良港として知られる釜石湾

3. 「牧師」の新しい姿

——そうした中で、高橋和義さんの働きは、「牧師」の新しい姿を示していると思っています。少し、お働きをご紹介いただけますか？

高橋和義さん：

釜石の社会福祉協議会の職員として月曜日から金曜日はフルに働いています。土日を中心にみことばを直接に伝える働きをしています。

釜石市社協は、成年後見、小口の貸し付け、在宅介護、児童館、入浴サービス、被災者見守り事業など、実に様々な福祉サービスを提供して地域に溶け込み・馴染んでいます。私はその中で被災者対象の「生活支援相談員」の仕事から始めました。それも続けながら、復興住宅の自治会形成、被災地域のコミュニティ支援にも従事してきました。おもに復興庁管轄の事業ですね。

具体的には、仮設団地への傾聴訪問と見守り、それから人々が復興住宅に移る当たりから、46ヶ所の復興住宅のうち何らかの「自治組織」が必要と判断された23カ所で自治会作りに励み、現在まで、21ヶ所で発足することができました。市からの委託事業でしたから、成果を評価いただいています。自治組織は出来はしても、住民の高齢化から継続に大きな課題があります。今はそれに取り組み、さらに組織の維持だけでなくコミュニティの再生に働きを進めています。

——釜石市は、江戸時代、「伊達藩」と「南部藩」の境界線が引かれた場所ですね。「盛岡」と「仙台」のそれぞれの勢力範囲が、ここで接していた。250年も続いたその状況が、明治政府の政策によって一方的にまとめられてしまった。

高橋和義さん：

それは歴史的には段階を経てのことだったようですが、確かに今でも「釜石」と言っても山間部もあり半島部もあり、人の気質が大きく異なります。またかつては小さな漁村だったところに近代製鉄の拠点が出来て、仕事を求めて大勢の労働者が流入しては数年で去って行く、ということを常に繰り返している町になりました。最盛期には人口10万に達して盛岡市を追い抜くと言われ、やがて製鉄所の合理化による衰退も経験してきた町です。市全体として一つにまとまるのが、今でも難しい。さらに、釜石市内には、いくつか県営復興住宅もあります。元釜石市民だけでなく、周辺の市町村からの移住者も、そこにはお住まいになっています。同じ釜石の方でも、ほんの少し離れた地域の復興住宅に入った人は、それだけでも「地域性の違い」を感じているようです。自力で自宅を再建された方、一般のアパートや戸建て住宅に引っ越して来ら



れた方々も加えると、いわゆる「新住民」が数え切れないほどおられることとなります。あの津波に遭って自宅と故郷を破壊され、違う土地にやってきて、「よそ者」同士で生活を始める——そのための自治会を構成することは、大変なことでした。

でも、自治会ができたとしても、生活がそれですぐ変わるわけでは、もちろんないのです。多くの人たちは、毎日の生活の中での「寄り合う場所」がない。「行き場」がないのです。「お茶のみ友達」もない。

それで私たちは、大型商業施設のスポーツクラブさんとも連携して、「おちゃっこ」の機会を作りました。そして「健康体操」もそこでやっていただきながら、傾聴ケアをしてきたのです。

そして今、私が担当している「生活支援コーディネーター」という役割は、介護保険制度から国が推進しようとしている働きで、ひとことで言えば超高齢化社会で「健康寿命」を伸ばす仕事です。高齢者の居場所、行き場所作り、ちょっとだけ手伝えばまだまだ自分で生活出来る高齢者のための市民団体による生活サービス有償ボランティア団体の支援もやっています。

——多くの「成果」の影に、でも、たくさんの苦労がありましたね。

高橋和義さん：

そうですね・・・実際、被災したために他地域から移住してきた方たちは、そもそも「集合住宅」に住むこと自体、初めての体験です。皆さん、広い住宅をお持ちの方ばかりでした。「こんな気遣いをする生活は初めて」というのが、実感だと思います。ゴミ出しのこと。猫の餌付けをしてしまった隣人のこと。駐車場のトラブル。諸々。諸々。そうしたことに戸惑い、苛立ち、諍（いさか）う。——そうした全部を含めて、「コミュニティ支援」が要請されます。ですから、向き合うことは「小さな案件」ばかり、となるわけです。「つまらないこと」に煩わされる。でもその時、「それこそが愛だ」と、気づかされました。そして、その気づきを大切にしようと、そう思って生きてきた被災地の日々でした。

中澤理事：

仙台にも、復興住宅があります。そして、まさにそうした問題があるのです。そして、しょっちゅう、喧嘩が起こる。たとえば「エレベーターの使い方」でも、驚くほど大きな揉め事になります。そうすると、私のところに相談が来きます。お話を伺うと、自治会が対応しきれない現実があるようなのです。

高橋和義さん：

本当にそうですね。そうした中で、自治会の役割も新たに定義され直すと思います。従来、祭りや季節毎の行事の実行機関、また地域行政の末端組織、さらには住民間の調整機関、子どもや高齢者への福祉事業の主体として機能してきた町内会が、地域関係の希薄化・高齢化によって、そこまでとてもやりきれなくなってきました。これからは、「防災・防犯・避難行動・見守り」に特化して機能するコンパクトな自治組織という方向に向かうのではないのでしょうか。

——そうした中で、辛く痛ましい出来事も、
ありますでしょうか。

高橋和義さん：

そうなんです。孤独死も、幾つも起こるのです。すると報道機関が取材に来られる。仕方がないことだと思いますが、ジャーナリストの仕事として「問題」を探すわけです。そうしたことに刺激されて、住民の中に抑え込まれていた満ち、噴出したりします。そして「深刻な問題」が記事になれば、行政側はひたすら守りに入ってしまう。それでは悪循環です。ですから、私たちは、その間に挟まるような役割を担います。

中澤理事：

そうして、私たちの生きている世間の、その本当の姿を、否応なく見ることになるのですよね。

4. 教会の「眠った」可能性

中澤理事：

でも、一つ、質問をさせてください。そうした思いをもって、そして、助力を求められて、破れの中に・誰も入れない部分に、入っていく——そうした人は、今、確かに求められていると思います。私も、そうであろうと思っています。さて、しかし、そこで問題が起こります。そうした現場で「痛んだ自分」は、どうやって癒すのでしょうか。和義さんは、どうされていますか？

高橋和義さん：

本当に、それは、問題です。「和解の務め」を真剣に・本気で担おうとすると、サンドバックのようになりますね。皆さん、どうしても「叩きやすいところ」を見つけて、叩いてくる。実際、「ご近所さん」も「行政の人」も「叩きにくい」ですよ。だから、私のところへ「たっぷり」言ってくるのだと思います。

中澤理事：

「何で、こんなことに・・・」と、実際、悩みます。それで「祈るしかない」と、私は気づかさ

高橋和義さん：

「社会は、割れるように、できている」と、実感させられています。みんな、どうしても、責め合う。そして、そこにクリスチャンである私がいる、そのことの意味も、実感させられています。その「意味」とは、「割れるところに和解をもたらし、破れを塞ぐこと」だと思うのです。それを自分の役割として担って行く。それも「福音伝道」だと思っています。その破れ・割れ目に、イエス様がいる、と思っています。聖霊がいる場として、自分がそこにいる。そういう自覚をもって、社会の破れ目に立つ。そう思っているのです。手を当ててくださる神様の、その手の先になる。

——そうした思いを、
職場でお話しになるのですか？

高橋和義さん：

はい。そういう思いを、クリスチャンではない方々に、私は、つつい、熱く語ってしまいます。やはり私は牧師なのでしょうね。でも、そうしたことを語ると、「それは、まさに、福祉の原点だ」と、職場の仲間が言うのです。「なるほど、動機づけが、違う」と、キリスト教信仰への理解を深めて下さるのです。それも、伝道そのものだと思わされています。社会で仕事をしていながら、極めて「福音的な仕事」ができている。そんな不思議なことを、体験しているのだと思います。

れることばかりです。でも、そのことを、被災者の方々が理解して、励ましてくれることもありました。

高橋和義さん：

祈る。本当にそうですね。そして、「イエスさまの苦しみは、これの何千倍だったかな」と、想像するようになりました。

中澤理事：

それでも、納得できない思いは、どうしても残りますね。

高橋和義さん：

そして、悩みますね。つまり、何でも「してあげる」と、必ず、支援された側の皆さんが、共同体として、弱くなる。「一緒に」悩んで苦勞する必要がある、ということです。ですから、工夫を要します。「自治」ということを一緒に、どこまでも謙遜に、考えていく。時には「指導」もしなければならぬのです。自分のような者が・・・と悩みながら、でも、責任を果たさなければなら

ません。「最終的には、いらなくなる」と、自分の目標だと思って、いつも悩みながら進めています。実に、その塩梅は、難しい。

中澤理事：

これは、つまり、キリスト教の用語でいうところの「牧会（牧師の担うケア）」ですね。

高橋和義さん：

本当にそうだと思います。会議の仕方、記録の仕方、必要な配慮——すべて、教会で牧師に求められる「牧会的配慮」と、同じだと思うのです。

——高橋和義さんは、今でも

「牧師」としての自覚をしっかりお持ちですね。

高橋和義さん：

はい。そして、そのことは、職場の中でも知られていまして、私は「牧師」として見られています。そして自分としては「教会のやり方」を、現場に展開しているつもりなのです。

——そうした可能性を、教会が持っている、ということですね。

高橋和義さん：

そうなのです。たとえば、教会には必ずある「規約」も、とても評判が良いのです。自治会を作る時、どうしても「規約」が必要になります。それで「ひな形」を探しますと、はっきりします。会社組織などの「規則」では、どこかかみ合わないところが必ず出てくるのです。そもそもの考え方が違うのだと、気づかされます。そうしたとき「教会の規約」を活用しますと、とてもうまくいったのでした。

——最近では「サーバントリーダーシップ」という言葉も、教会から広がっていますね。

高橋和義さん：

本当に、そうですね。ぜひ、そうした点、教会は自信を持ってほしいと思います。教会は社会が必要としているものを歴史的に豊かに育ててきていますから。

5. 起こった変化

——今の教会は、もしかすると、「まず、教理を教え、それを信じてもらってから、信仰生活を知ってもらう」という感じかもしれませんね。

高橋和義さん：

その「後・先」を、逆してみたいと思っています。理屈や概念にばかり躍起になっている自分たちを、変えてみたい。そう思って、自分は変わったと思います。

——教会の可能性は、眠っているのでしょうか。

高橋和義さん：

そうかもしれません。こちらに来て、「伝道」とか「教会」を、根底から考えさせられました。古代の教会・迫害や新約聖書の時代のクリスチャンのことを想像しています。結局、人格同士の出会いが、その最初にあったのだと思うのです。それが、今は「イベント」に集中するようになってしまっていないだろうか。「イベント」や「行事」から解放されて、人と出会い、共に生活をする、ということが、「伝道」とか「教会」ということの実質なのではないか。

結局、その場・その場で、働くこと。人を育てること。奉仕すること——キリスト教は、そうやって始まった・そうして福音は広がったのではないかと、今、聖書を読み直して、考えているのです。私は、そこから改めてスタートしたいと思っています。「生きたクリスチャン」の姿を見せていくことをもって、「伝道」としたい。クリスチャンは何に怒り、何に喜ぶのか。それを示していきたい。信じると人はどうなるのか、それを生きたサンプルとして先に示せたら、これから信じる人にとって信仰はとても具体的なものになると思います。先に「教理」や概念を伝えようとする、そこで壁にぶつかって止まってしまう、そういうアプローチをこれまで私たちはずっとしてきて、それで宣教が進まないと言い続けてきたのではないのでしょうか。



——例えば、どんな変化がありましたか？

まず、「天国」観が変わったと思います。「ここではないどこかに」という救いに、私も憧れていたと思うのです。「この地」について無関心になりがちになる。どこか「社会問題」には本気になれなかったと思うのです。「天国という別の世界へ行く」という事は、聖書的に正しかったのか。今、そう思う自分は、確かに変わった気がします。

——どうして、そのように変わったのでしょうか。

高橋和義さん：

やはり「この地」に来たという事が大きく影響していると思います。この地で、この社会の皆さんと、同じことを体験して、そこに福音が染み出して行くような、そんな存在でありたいと願って過ごすことが、変化をもたらしたのだと思います。

中澤理事：

なるほど。そのように、変化を体験してみて、さて、過去の自分との関係は、どうですか。

高橋和義さん：

はい・・・正直、寂しさを覚えています。気が付くと、以前の繋がりは、薄れているのです。過去との繋がりは、大切なのに・・・ノスタルジーは、あります。ひとりぼっち感があるのです。でも、今までのあり方にとどまっていたら、結局、教会は「内向き」になる。成果を求められ、成果が上がらず、疲れてしまう。そもそも、何かが根元から間違っているのではないかと——聖書に戻って、考え直して、新しい世界に自分を投げ出していきたい。そう思って、自分を慰めています。

中澤理事：

私も、震災を経て、変わりました。「日曜日も、求められるなら、外に出て働こう」と考えるようになりました。そうしたら、ある人から「礼拝を大切にしていない」と言われてしまって・・・とても切なかったですね。そんなことがありました。高橋先生は、過去の自分が追い求めてしまっていた「成果」を、手放したのです。そして、目指していた「天国」の姿が変わったと言われました。「地上を離れて天国に行く」というイメージを「地上が天国になる」というイメージに切り替えられた。そのことは、とても重要なのだと思います。素晴らしいお話を伺っていると思います。

高橋和義さん

ありがとうございます。励まされます。これは、大げさに聞こえるかもしれませんが、まさに「第三千年期」の教会の歴史が始まろうとしている、と思っています。これから、いろいろ、どんどん変わるのでしょう。変わらなければならない課題が、教会にはたくさんあると思います。私も「日曜日を守らなくなった」「あの人はもう牧師ではない」と見られることもあるようです。「そくそく」とした寂しさを、感じています。でも、すべてが変わっていくのだろうと、そんな実感もしています。

——新しい時代の新しい教会の姿を、

ぼんやりとでも、見つめておられるのですね。

高橋和義さん：

なんとなく、目が開かれたような気がしているのです。いろいろなことを考える前に、実践が始

まってしまった。事実が先行しています。とにかく、そこに追いつきたいと、必死です。あるいは息切れしているのかもしれませんが。「社会の中で、仕事をしている牧師」というあり方の中で、すべての見方が変わってきたように思います。

高橋芳江さん：

昔、東京圏で、「普通の牧師夫婦」らしくしていた時を思い出します。その時、「キリスト教関係者の目」を気にして過ごしていました。その中に、自分の「立場」もあったのです。でも今、変わりました。「クリスチャンでない街の人」が見ている、その中で、牧師夫婦として生きている。そのことを、実感しています。実際、そのように声をかけてくださるのです。東京圏では、そういうことはありませんでした。せいぜい、街の人とは「挨拶」しか、しませんでした。でも、釜石では、違います。もっとはっきり、いろいろな話を、街角でしている自分がいます。

高橋和義さん：

こちらに来て、クリスチャンではない方に、結婚式の司式を頼まれ、準備から司式までを通して、丁寧に福音をお伝えすることができました。また、クリスチャンでない方に「聖書の話聞かせてよ」と、頼まれるようになりました。「一緒にクリスマスの讃美歌を歌いたい」という声もいただきました。「そうすることで、自分は、人生の総仕上げをしたい」と、その方はおっしゃいます。そうしたことを通して、今、自分は「釜石の牧師」になったのだ、と実感しています。

高橋芳江さん：

「キリスト教に入る覚悟はないけれど、聖書を一緒に読みたい」という方が、多くいらっしゃるのです。私たちは牧師夫妻ですが、教会を担当していません。ですから、そうした方々に出会いやすいのだと思います。そして今、そうして聖書を読む方々の中から「この聖書の言葉は、俺の生活のことを言ってる！」と喜んでくださる声が聞こえています。

高橋和義さん：

実際、変な解説をしなければ、聖書を読むと、誰でも、そういう感想をお持ちになるようです。でも、この事実を語っても、既存の教会の中ではなかなか理解されない。でも、大きく変わりつつある時なのだと思います。

中澤理事：

大都市は別にして、ほとんどの場所で、実は、牧師は「教会の外」に出なければ、何もできません。そして出て行けば「友達になる」ことから始まる出来事が起こります。

「洗礼ありき」「奉仕ありき」「礼拝ありき」という教会のイメージは、私の中にも根深くあります。しかしそれはもう行き詰っている。「洗礼・

奉仕・礼拝」ということが、本当は何を意味していたのか、新しく語り直す必要があるのだと思います。その必要を、若い人たちが感じ始めています。私は、年長世代として、それを支えたいと思っています。

高橋和義さん：

東日本大震災の震災直後、教会による支援活動のどこでも「教会の壁を低くしよう」「300年、400年というスパンで考えていこう」と話し合っていたのを懐かしく思い出します。けれど、もう「もとに戻っている」ことを、たくさん見えています。そして、そのことに問題を感じている人も少ない。あれだけの経験をして、社会はそれなりに変化したのに、教会は元通りでは寂しいことです。

中澤理事：

でも、先生が講演をされたビデオを Youtube で見て、私は感動しています。多くの方が、その感動を分かち合っていると思うのです。地元に根付いて、その地の必要に応じて行く。そこにキリスト教が醸（かも）し出される——そういう活動を、丁寧に続けたい。今日も、そしてビデオの中でも、

高橋先生は、そのことをおっしゃっていたと思います。



Youtube で「高橋和義 創造の回復」と検索ください。

中澤理事：

実際、「東北」はクリスチャンに理解がなかったと思いますが、それが、震災で変わった。それは、まさに高橋ご夫妻のような活動がもたらした変化だと思うのです。

6. これから

中澤理事：

さてそれで、考えるのです。その活動を、継続することの大切さ・大事さです。常々、そのことを思っているのです。

実際、そうした「地味な」活動は、それを担った人々がこの地を離れば、やっぱり「それまで」となりますね。どうしても「生涯を通して」の活動・派手でなくても、一人ひとりに寄り添う活動が、継続されること。それが大事だと思うのです。もし、そうした活動を担う人が、十人もいれば、すごいことだと思うのです。

でも、どうしても、宣教師や牧師たち（つまり私たち）は、教会を作りたがる。でも、そうすると、その活動は、どうしても、どこか、閉じられてしまう。

高橋先生の今のやり方は、本当に、理想的だと思います。時間はかかるけれど「一番いい」と思う。ここまで継続されたことに、深く敬意を覚えますし、継続の結果、ここまで整えられたのだと思います。

——今の活動は、どうやって

継続されているのですか？

高橋和義さん：

経済的なことを先に言えば、社会福祉協議会からの給料で足りない分を、全国からの献金で埋めていただいています。献金の半分以上は教会からのものです。

継続の心構えはと聞かれれば、とりあえず私は継続のこと、「後継者」などについては考えず、行けるところまで行ってみようと、そう思っているのです。

それから、その上で、この働きが「高橋の働き」にならないように、気を付けています。地域にとっては「以前、そういう人がいたね」という印象だけしか残らない「個人プレー」ではダメです。それで、今年度から「釜石祈りの家」を名乗るようになりました。この点に関しても、試行錯誤は続きます。

——このインタビューを通じて、高橋さんご夫妻に繋がって、支援しよう、という方が起こされることを願っています。本日は本当に、ありがとうございました。

(了)

陸前高田から

株式会社「陸前高田企画」 村上清さん インタビュー

宮城県から三陸沿岸を北上すると、陸前高田市から岩手県となります。そこにも広がる津波の大きな被災地に、「復旧」を超える「復興」を目指す大きな努力が続いています。その中心に「陸前高田企画」という株式会社の皆さんがおられました。2022年7月4日、「陸前高田企画」様をお訪ねし、その代表取締役 村上清さんに、お話を伺いました。「復旧」を超える復興の可能性を感じるひと時となりました。以下、ご紹介いたします。

聞き手：川上直哉



——震災直後から今日まで、村上さんは、陸前高田の復興のために尽力されてきました。その目標に、「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」というものがあると伺いました。

村上さん：

「ジェンダー」とか「ダイバーシティ」という言葉は、大切なものです。でも、どうでしょう。こうした言葉があるのは、その背後に何か「問題」があるからですね。もし、いろいろな方々が、差別なく、いろいろな思いで活動できる、とすれば、そうした言葉自体が不要になると思うのです。それで、「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」というコンセプトを、2011年12月に作ったのです。

——そして、具体的には、どのような復興事業へとつながりましたでしょうか？

村上さん：

たとえば、「障がい者も社会参画できる」最低限の整備として、市内の新しい建物は全て、バリアフリーにして行くことからはじめました。

私たちは、町を全部失ったのです。そして、サポートを受けて立ち上がりました。ですから、そこから得たことを分け合って行きたいと願っています。そのために、世界に誇れる美しい街を目指す。地域の美しさを甦らせる。そうした復興事業を目指して、今も努力を続けています。



——「美しい」という目標ですね。

村上さん：

はい。この場合の「美しい」は、心根の美しさを指しています。ですから、形ばかりでは足りないのです。それで、官民間わず、みんなで様々に工夫をして行く、そのお手伝いをしようと思い、市の補助を得て認証制度を設立しました。また、市も主体的に努力を進めてくださっています。「ふるさと納税」関連品のパッキングをはじめ、名産の椿茶など、障がい者の活躍の場を進めているのです。

——陸前高田市全体で、力を合わせておられることは、本当にすごい事だと思います。

村上さん：

私の古くからの友人でもある戸羽太さんが、あの日からずっと、今も変わらず、陸前高田市長として素晴らしいリーダーシップを発揮していると思います。戸羽さんは、ずっと前から、日本のどこにでもある「知的精神障害者児の扱い」に、強い違和感を持っていました。音楽を愛する彼は、若いころにアメリカを旅しました。そこで「障がい者も普通に生活している」という様子に衝撃を受けます。「車椅子でボウリングをしている」という姿は、当時、日本では考えられなかったのです。障がい者だけではありません。フロリダでは、高齢者の生き生きした姿に強い印象をうけたようです。そこから学びを深め、北欧から「ノーマライゼーション」という言葉を知り、そしてさらに「その言葉もいらないまちづくり」を、私に相談してきたのでした。

——市として団結し、そして、特色ある復興への取り組みができた、ということですね。

村上さん：

たくさんの方々のお力の賜物だと、感謝しています。その上で、さらに、「合併しなかった」という私たちの特色が活かしていると思います。

「平成の大合併」の時、私たちは、「合併を拒否した町」となりました。「1万8千人の町」として、陸前高田市は存続したのです。そしてそこに津波がやってきました。「2千人」が亡くなったのです。そのお一人おひとりに、遺族がいます。遺された友人がいます。「2千人分」の苦労が、無数に広がっているのです。

例えば、市職員を見てみましょう。400人程度の陸前高田市役所職員に、100人を超える犠牲が出ました。実に「4人に一人」の規模でした。その家族を考えると、大きな大きな犠牲です。そしてさらに、市長個人を見てみても、その痛みは深刻でした。実に、市長に選出されて三週間後に「3.11」となり、そして彼は、家も妻も亡くしたのです。だから、市職員も市長も、当事者としての思いを強く持っているのです。

——「形だけ」の「従来型の大型公共事業」という批判が、復興事業には、いつもついて回ります。被災地の困難は、現場に情性を生み出しがちなのかもしれません。でも、そうした情性に、皆さんは力を合わせて抗（あらが）っておられる。素晴らしいと思いました。

村上さん：

そうありたいと思っています。実際、「政治の役割は、現場で立ち上がれない人を助けるところにある」と、私も市長も考えているのです。ですから、それは「津波の被災地」ということにとどまらないと思っています。私たちは「難民」も受け入れたい。「外国人」への支援もしたい。でも、私たちは小さい。だから、全国・全世界に、お力をお借りしたいと思っています。

(了)



被災地・石巻で 本当の「福祉」を

「べてるの風」のパン工房

「3.11」では最大級の津波被災地となった中核都市・石巻市で、「べてるの風」は始まりました。「被災地で精神障がいと共に生きること」の困難と直面した人々の間から、本当の福祉を目指した新しい挑戦が続いています。「この苦勞を大切にしてみよう」という挑戦です。東北ヘルプは、その最初から、この挑戦に、ご一緒させていただきました。

今、その「べてるの風」は、新しい一歩を踏み出そうとしています。「本当の福祉」を目指す「パン工房」が動き出したのです。その指導に当たられる阿部雄悦さんと、「べてるの風」理事長の大林健太郎さんに、お話を伺いました。

(聞き手 川上直哉)

——半世紀を超えるパン作りの経験。今、それがこの現場に生きていますね。

阿部さん：

はい。この「パン生地」を見てください。この生地は、冷凍したものです。でも、冷凍しても酵母が死滅しないような工夫をしています。これも、私の人生の中での試行錯誤の成果です。それから、常温に戻した時にも、たとえばバターを入れると、発酵が遅くなります。そうして、キッチンの温度やオーブンの性能などに合わせて、最善の生地を作り出す。そうした方法を、長年、失敗しながら、手に入れてきました。

——なるほど、試行錯誤、失敗の経験が、パン作りの秘密なのですね。



阿部さん：

はい。「レシピでパンができるわけではない」ということです。それは、とても大切なことだと思います。

生地を作るのも、目で見て、一つずつやる。そうしないと、覚えません。やって、覚えるのです。

「この機械がなければできない」ということはない。「機械が造るわけではない」ということです。むしろ、機械が無いところから始めて、覚えたほうがいい。

その意味で、始まったばかりのこの「べてる」のパン製造は、大きな可能性があると思います。



——阿部さん個人の人生について、少しお話しくさいますか

阿部さん:

私は昭和16年に、石巻の隣にある女川町で生まれました。小さい時、防空壕にも入ったり、空襲を受けて近くの山に避難したことも覚えています。爆撃機が見えた時、山の中で母親が自分から離れて行きました。二人一緒にいたら、一緒に殺されてしまうと、そう思ったのでしょう。でも、幼い私は、わかりませんでした。辛い思い出になりました。よく覚えています。



小さい時から、碎石や水産業の手伝いをして生活しました。近くには中国大陸や朝鮮半島の人の集落もあって、「近づくな」と大人が言っていたことを覚えています。14歳で、一関市のパン屋さんで「丁稚奉公」に出ました。3年の約束でした。そして年季が終わって、あと一年「御礼奉公」をしました。

自分は家族の中では「五男」でしたが、兄たちは家を出ていましたので、奉公が終わって、実家に帰りました。女川で「どら焼き」を焼いて売ったのが、パン職人のはじめです。薪の石窯で焼きました。薪が炭になって、その熱で焼く。温度計も何もない中で、勘で、焼きます。お客さんにも鍛えられました。そうして、「すべては勉強だ」と学んだのでした。今も、勉強を続けています。

——体を使って、失敗をしながら、勉強するのですね。

阿部さん:

とにかく「できない」と言わないようにしているのです。昨日も、ひとつ、失敗をしました。でも、今日は、不思議にうまくいった。そうやって、毎日勉強です。失敗した方が、反省して、覚える。それが始まりです。それから、何でも、丁寧に・正確に、できるように努力します。それから、スピードを付けて行く。そうすると、技術が向上するのです。

——この「べてるの風」で、障がいと共に生きる方々が、

そうした「技術」を手にてきたら、本当に素晴らしいと思います。

阿部さん:

まず「一人」が技術を身に着けることだと思います。そして、また一人。施設の利用者が、互いに教え合うようになって行けばいいなと思っています。そのために、まず「一人」と思っています。

——時間がかかるのですね。

阿部さん:

はい。私の仕事の最初も、とにかく「一軒一軒」女川の町を回り、パンを売っていったのでした。その時、丁稚奉公時代の体験が活かされたのだと思います。朝5時頃から自転車で売り歩くのです。「自転車」ですから「自動車」には勝てません。だったら、ということで、早く起きて仕事を始めることにしたのです。それから、ちょっと考えて、お客さんの「台所仕事」をボランティアで手伝いました。そうしたら、「一軒一軒」親しくなって、知恵もいただき・・・と、そんな感じで、ずっとやってきました。そうして、10年かかって、やっと、店を出せたのが私の経験です。それまでなかなか、苦勞した。でも、振り返って思うのです。「時間がかかったけれど、それでよかったのだ」ということです。特に最近、教会に行くようになってから、そういう思いが強くなりました。「人と比べる」ということが、まったくなくなったのです。

——今のお仕事への思いを教えてください。

阿部さん：

この仕事は、自分の人生の「最後の仕事」と思っています。ここに集っている仲間が、とてもいいな、と思っています。何より、ハートがいい。施設の利用者が、一人ひとり、すごい能力を持っている。ただ、それを「活かしてきっていない」かな、とも思います。



福祉の現場では「利用者が主役」のはずです。でも、それが「絵に描いた餅」になっているのが現実だと思います。「障害と一緒に生きる人が、技術を身につける。施設の利用者同士が、教え合い指導し合う」というのが、本当の姿だと思います。そうしたら、施設の職員が、自分の仕事に集中できます。そうしたら、福祉の水準も、どんどん向上するでしょう。それが、本当の姿だと思うのです。それを、人生の最後、実現してみたいと思っています。

もしそうしたことが実現したら、ここは、もっと活気のある場所になるでしょう。みんなが元気になるために、自分はここにいる、と思っています。

そう思って、久しぶりに福祉の現場に出てみたら、気づくことが多くあります。色々、忘れていたのだと、やっぱり勉強することばかりです。

——震災前から、福祉に関わっていたのですか。

阿部さん：

震災前、中小企業の経営者として、障害者雇用等、福祉に関わっていました。でも、限界を感じていた。それで、いつか施設を作ろうと思って準備をしていたら、よい福祉関係者と友だちになり、「一緒に女川町でやろう」となったのです。ちょうどその頃、自分の家族の一人が障がいを抱えて生きるようになり、「障がい者」という存在は「身近」なのだと、実感しました。

——そして、まさに女川町に福祉施設が出来上がったところに、

「3.11」となった。そして、津波に遭ったのでしたね。

阿部さん：

はい。町自体が、完全に破壊されてしまいました。できたばかりの私たちの事業所も、すべて破壊されました。そして、施設の利用者が二人も亡くなったのです。

でも、その女川の福祉施設も、皆様のおかげで、無事に復旧させることができました。「これでひと段落」と思っていたのです。



——そうした中で、「べてるの風」の大林理事長が、
「三顧の礼」で阿部さんのお力を借りすることに成功された！

大林さん：

はい。本当にありがたく思っています。2019年に、阿部さんにお目にかかりました。女川で「さんまパン」が大評判になっていました。すごいな、と思っていたのでした。

阿部さん：

私は、大林理事長のことを「経営者としてすごい」と、尊敬していました。福祉の業界では、「製造」することばかりが議論されて、「販売」することは、あまり考えられていません。でも「べてるの風」は、「販売」に特化して、全国の方々から支えていただいている。それはすごいことだと思いました。



左がパン職人の阿部雄悦さん。右が理事長の大林健太郎さん。

大林さん：

今、「べてるの風」に、新しい風が吹き始めたと思っています。「販売」に特化しがちな私たちは、福祉業界の中では、小さく見られてきたと実感しているのです。今、製造部門を作って、諸先輩方と「同じ目線」になれるかもしれません。大きな期待を抱いています。

——「健常」を標榜する社会・世の中で「障がい者」が働き手として生きて行く、そのお手伝いをするのがつまり「就労支援」という事業所の役割になりますね。その意味では、利用者各位が「技術」を手にてきたら、本当に助けになりますね。

大林さん：

はい。その際、「べてる」の基本は、これまで通り、いつも大事にし続けていようと思います。つまり「病気を抱えての就労」で、いいんだ、ということです。そしてそれこそ、私たちの・被災地での「新しい挑戦」だと思っています。



事業所の壁には「べてる」の基本になる言葉が掲示されています。

——「福祉」あるいは「就労支援」を考える時、阿部さんが大事にしていることは何でしょうか。

阿部さん：

私が大事にしていることは「礼儀」と「清潔」です。ここの利用者は、実に「礼儀正しい」。それは大事なことで、素晴らしいことです。それを大切にして、「掃除から始まって、掃除に終わる」ということを、覚えて頂ければと思います。「製造」の技術を手にすると、だれでも、必ず、人間として成長します。それを、実感してほしいと思うのです。

——これからの目標は何でしょうか。



大林さん：

次の目標は、パンの販路の安定した開拓です。企業や公共機関へアプローチを強化しようと思います。私たちの強みを、これから生かしていきたいと思っています。そして、全国の「ベテルの風」を応援して下さるみなさま、石巻の被災地を忘れずに覚え続けて下さるみなさまにも、お届けできればと願っています。

阿部さん：

今、パンの製造は、まだ、数量的には安定していません。急がないことだと思います。そして、今のうちに、「新製品」を作り出したいと思っています。ここのオリジナル製品を開発したいのです。



——もう、新商品の候補がありますね。



阿部さん：

「金華鯖パン」や「わかめの食パン」や「わかめのパウンドケーキ」があります。まだ試作品ですが「珍しいパン」になります。評判は、良いようです。それから「ラスク」も、もうすぐ完成すると思います。これから「石巻の苺とトマト」を使って「ケーキ・サレ」という新しいパンにも挑戦していきます。

それから、定番の「あんぱん」などについても、この事業所のスタッフさんが、素敵なシールを作ってくださいました。一つひとつ、とても素晴らしいと思っています。

大林さん：

全国の皆さんに「楽しみにしていて下さい！」と、お伝えしたいと思います。（了）



事務局長の阿部豊さんと、
理事長の大林さん。

事業所の入口にて



福島宣教の働きを継いで

「シオンの丘」の「プーさんプロジェクト」

「3.11」から10年が過ぎ、さらに日々が積み重なっていきます。原発事故から時間が経って、気が付けば「原発再稼働は当然」という言葉も、あちこちに聞こえるようになりました。

時間というものは、このように、全てを風化させる。

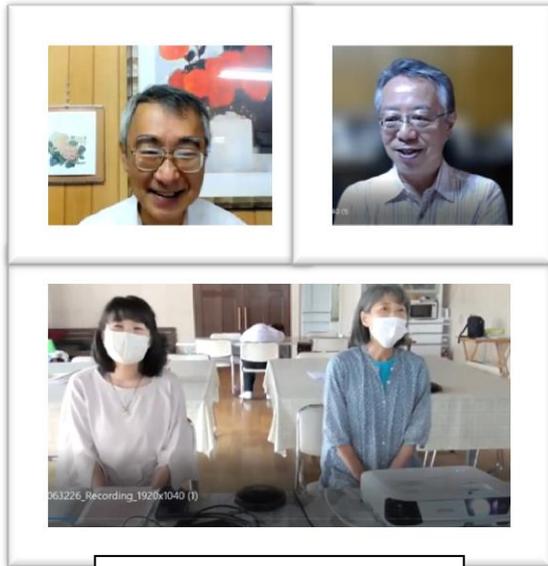
でも、全てが風化するわけではありません。「歴史」として積み上がり、「今」新しく脈動する力を生み出すことも、時間の流れの中で、確かに起こります。

福島県には、古い教会の歴史がありました。地域に奉仕するクリスチャンの営みが、営々と積み重ねられていました。その歩みは「原発事故」の中でも止まることなく、むしろ前進しました。そして、今、そこからさらに「先」へと、朗らかに歩み出そうとしているプロジェクトがありました。そのプロジェクトは「プーさんプロジェクト」と名付けられました。それは「養蜂」のプロジェクトでした。そのプロジェクトに、「食品放射能計測所」も、お手伝いすることができました。

このプロジェクトを担われている船田肖二先生、船田ゆう子さん、杉田朋子さん、そして東北ヘルプ理事の木田恵嗣先生に、お話を伺いました。

(聞き手 川上直哉)

——まず、みなさま、自己紹介を、お願いします。



左上から、船田先生・木田先生
左下から、杉田さん・木田とも子さん

木田先生：

ミッション東北 郡山キリスト福音教会の牧師をしています木田です。震災の後、郡山に東北ヘルプの協力を得て計測所が建てられました。今は主に、私が計測をしています。最近、「シオンの丘で採れた蜂蜜と蜜蝋」を計測しました。今回は「不検出」となりました。そのことを計測所の会議で報告しましたところ、ぜひ、この「養蜂」のプロジェクトについて、取材をしたいと川上先生から提案があり、今日はお集まりいただきました。

——日本基督教団でも、最近、宣教研究所から「福業」（福音を伝える伝道事業としての副業）として「養蜂」の可能性があると発信されています。皆さんも、まさに、「養蜂」のプロジェクトを新しく始めたのですね。

船田先生：

はい。「プーさんプロジェクト」といいます。面白い名前、かもしれませんね。

「シオンの丘」という場所が、福島県須賀川市にあります。この場所には、長い歴史があります。安藤喜市という牧師がおられました。戦

船田先生：

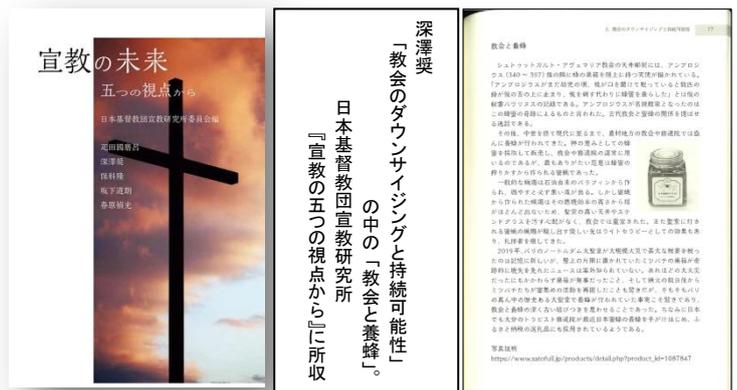
日本イエス・キリスト教団 白河栄光教会の牧師の船田肖二と申します。私たちの教団でも、少子高齢過疎の現実切実で、私もいくつもの教会の責任を負っています。同様に、震災の前から「シオンの丘」の管理責任も負っています。今日は、その「シオンの丘」で始まった新しいプロジェクトのご紹介をさせていただきます。

船田ゆう子さん：

船田肖二の妻です。去年の今頃は、まさか「養蜂」を始めているとは、思いもしませんでした。昨年11月から、不思議な出会いが重なり、あれよという間に、このプロジェクトに関わっています。まだ始めたばかりで、どうなるかわからない中にいます。今日のような機会をいただき、徐々にビジョンを得られればと願っています。

杉田朋子さん：

白川栄光教会の信徒の杉田です。初めまして。日本各地を転々として、白河に10年になります。「蜂」に関わることになって、人のかかわりが増えました。そのことを、本当に面白いな、と思っています。「神様の不思議な業だな」と、そう思っています。



中・戦後にかけて、大きな働きをなさいました。その人生の後半、安藤先生は、農業や畜産を神学生と共に学ぶ拠点を、ここ須賀川に造られました。神学校が閉校となった後、この施設全体が「シオンの丘」と呼ばれ、地域の多くの教会が活用するようになりました。そして震災の時、この「シオンの丘」が、福島県内の重要な支援

センターになったのです。そして震災後、農作業もここで進められ、今はブルーベリーなどが豊かに実る場所となりました。この施設全体の管理者である私も、自然が好きなのですから、果物の木を植えて育てています。

そうした中で、日本バプテスト教会連合 玉川キリスト教会牧師の福井誠先生から、海外で活

動してるクリスチャン養蜂家のお話を聞く機会が与えられ、刺激を受けたのが始まりです。ここで「養蜂」ができますと、周囲の農家の方々の「受粉作業」が楽になります。それは確かな地域貢献になる。そうした話が盛り上がる中で「プーさんプロジェクト」という名前が出て来ました。何となく「いいね」となりまして、今、そのまま使っています。

——このプロジェクト名の使い心地はいかがですか？

船田ゆう子さん：

もしかすると「わかりにくい」と思われるかもしれませんね。私はよく「プーさんプロジェクト（養蜂）」と、一言の説明を付けて、お伝えしています。

杉田朋子さん：

私は「ぷープロ」と呼んでいます。とても平和なイメージがあると思っています。のどかなイメージがあって、好きです。

木田先生：

私もいい名前だと思っています。「ディズニー」のイメージでしょうか。

最初、「シオンの丘で養蜂をする」と聞いて「ほんとにやるの？」と思いました。でも、始めましたね。不思議な気持ちです。

須賀川の「シオンの丘」の周りには、リンゴ畑、梨畑がたくさんありますから、これが農家とのつながりに広がるのではないかと、思っています。日本各地に田園地帯があり、そしてそこにキリスト教会がありますね。そして、ここに宣教センターとして「シオンの丘」がある。この「ある」ということは、とても大切なことだと思います。実際には、どうしても、教会は地域では「浮いた存在」となってしまう傾向も、あると思うのです。けれど、「養蜂」をきっかけに、上手に、近所の方と、お近づきになり、良いつながりを広げる可能性が生まれると思うのです。これはとても良い働きだと思いました。



——「プーさんプロジェクト」。持続可能な活動になるといいですね。

木田先生：

正直に言いますと、私は最初、このプロジェクトについて、半信半疑だったのです。でも、始めてみますと、意外にたくさん、取れましたね。蜂蜜も、蜜蝋も、こんなに取れるんだ、と、思って、驚きました。「大金」を生み出すようなことではないと思います。でも、有効に用いられたら素晴らしいな、と、思って見えています。

——「シオンの丘」という場所と、このプロジェクト。響き合うものがありそうですね。

木田先生：

1901年に生まれた安藤先生が、99年に及ぶその生涯の最後の長い時期を過ごされたのが、この「シオンの丘」という場所でした。神学校が生まれ、手作りで宿舎が建ち、神学生の生活が「自給自足」で回るようにと、養豚等を開始した。貧しい農村の生活に耐えられるように、という目標を掲げた神学校教育でした。そういう場所が、この「シオンの丘」なのです。私は、その神学校の一番最後の卒業生です。



左:「堤キリスト教会」時代の献堂式の様子 右:現在の「シオンの丘」
「シオンの丘」とその前身の「堤キリスト教会」については以下の資料を参照
木田恵嗣「堤キリスト教会の歴史」 <https://xfs.jp/oWU3v>

紆余曲折あって、その神学校の土地と施設を日本イエス・キリスト教団のみなさまに管理していただくことになり、そして、震災のボランティアの拠点として大きな働きを担った。震災を

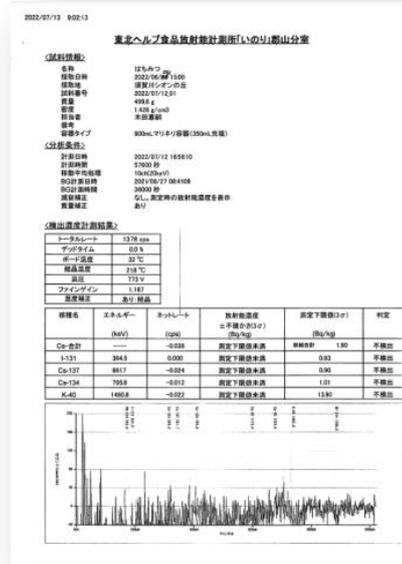
経て11年。今、その「シオンの丘」で、周囲の農家の人たちと協力しながら、養蜂が始まっている。不思議な、神様の素敵な働きを、見ているような気がしているのです。

——そこに、放射能計測所の役割もありました。

木田先生：

はい。はじめは、本当に心配したのです。

あの原発事故があって、福島県を含む広範な地域に放射性物質が降りました。その後、東日本で採れた蜂蜜から、高い放射能が検知されたのです。震災直後「食用には向かない放射線量」の蜂蜜を、私も、いくつか検出しました。それで「大丈夫かな」と心配しました。でも今回の計測では「検出限界値以下」でした。検体がたくさんあり、たくさん測ることができたので、ある程度の精度も保てたと思います。今回は、大丈夫でした。自然が・環境が、回復しているのかもしれない。安心しました。



二〇二二年七月十三日
郡山食品放射能計測所にて「シオンの丘」の蜂蜜を計測。
結果は「不検出」でした。

——具体的には、どんな「養蜂」事業を始めているのでしょうか。

船田先生：

最初は「ニホンミツバチ」を考えました。「手がかからないで、量が取れて、収益になる」という評判でした。でも、実際には「セイヨウミツバチ」で始めることになりました。不思議な人のつながりの中で、クリスチャンで専門家の先生のご助言を頂いて、そのように始めることになりました。

今年2月には、基本的な研修をオンラインでしていただき、3月31日に箱を設置しました。

今は「ニホンミツバチ」も、少しずつ、始めています。

ミツバチは「家畜」とも呼ばれます。つまり、扱いを間違うと、社会問題だって起こしてしまうのです。杉田さんのご夫君(充さん)が、精魂込めて、担当して下さるようになりましたことは、とても大きいと思います。お忙しい仕事の中に時間を割いてくださり、日曜日、早朝礼拝をしてから作業に当たってくださっています。

——どれくらいの規模で、始めましたか？



今、蜜蜂の巣箱は、二箱です。養蜂箱は、それぞれ二段になっていて、下に卵があり、上が蜜を溜める場所になります。取る時期によって、味が違うのです。それは結局、花の種類が違うから、だそうです。これは新鮮な驚きでした。つい最近「栗の花」の蜜で、実に独特なものでした。

蜜を取りすぎると、ミツバチの「越冬」ができなくなる可能性があるのだそうです。「この冬を超えたい」という目標を見つめて担当くださる杉田さんと一緒に、地道に緻密に進めています。その中で、私としては「心の豊かさ・楽しさ」を見つめたいと思っています。

——これから「販路」を探さなければなりませんね。

杉田朋子さん：

なるべく多くの方と、時間をかけて、ご協力を頂き、プロジェクトを進めたいと思っています。まだ「販売」ということはしないで、このプロジェクトを応援してくださる皆さんに献金を頂き、その御礼として蜂蜜などをお贈りする、ということで進めたいと思っています。

このプロジェクトには、夢がいっぱい広がります。まず、蜂蜜がたくさん採れるためには、「お花」がたくさん必要です。地域にお花が増えて行くことを、夢見ています。

そして、蜂蜜を素敵な製品にするために、デザインをしてくださる方も必要ですね。そのデ

ザインから、ワッペンが生まれ、芋版が生まれ・・・と、つながりが広がり、その広がりをみんなを感じられるような、かわいい、おもしろい、楽しい、そうしたことが広がっていくように、一つひとつ、プロジェクトを進めていきたいと思っています。

船田先生：

今、私たちの考えとしては「販売はしない」という方針なのです。「シオンの丘」と地域とのつながりを生み出し、また、「シオンの丘」の歴史とのつながりを生み出す、そんな「養蜂」でありたいと思っています。そのために、この蜂蜜を用いていきたいと思っています。

——今、どれくらいの量が採れたのでしょうか。

杉田朋子さん：

蜂蜜は、100gの瓶に「108本」詰められました。でも、まだまだ、残っています。

木田先生：

蜜蝋も、かなり採れましたね。天然の蜜蝋は、木工製品の仕上げ材として「とてもよい」のだと聞いています。

船田先生：

そうですね。そうした可能性も、どんどん、模索したいと思います。ろうソクなどは、教会で喜ばれるでしょう。まだ、たくさんはないのですが、蜜蝋も、これから、増えて行くだろうし、教会でどんどん広げて行くこともあり得ますね。

(了)





支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍泉尾小隊士官）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2022 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com